

# 特定研究開発促進事業 (イワガキの再生産機構の解明と増養殖技術の開発)

勢村 均・石田健次

## 要 約

養殖イワガキを対象に、再生産機構の解明を行なうとともに、養殖技術の開発を行なう。今年度は、昨年度に引き続き、成熟、産卵期と水温条件との関係を検討する。また、異なる養殖条件下での稚貝の成長を観察し、成長に関与する条件を把握する。人工種苗生産については、生産を安定させる条件を調査する。

### 1. 成熟・産卵期

3月から4月にかけて成熟度指数が最低となった後、上昇を始め、8月から9月に最高値を示した。10月以降は再び低下した。一方、水温は、昨年と異なり、夏期の上昇が少なく、26℃であった。この水温の変動傾向の違いが、昨年と今年の成熟度の月変化に影響したと考えられる。

### 2. 垂下養成稚貝の成長

島根半島側と隠岐島側で、稚貝の成長や生残に著しい違いが観察された。その原因は、主に冬期の施設の振動によると考えられた。

### 3. 人工種苗生産

昨年度良好であった生産方法の、再現性が確認できた。また、Nannochloropsis の培養液を幼生の飼育水に添加することで、幼生の生残が高まる傾向があった。

\* 詳細は、平成8年度特定研究開発促進事業報告書（イワガキの再生産機構の解明と増養殖技術の開発）を参照のこと。